

論文審査の結果の要旨

申請者氏名 高山 範理

研究は、人間の内外面に存在し、あらゆる判断に関与することが想定されるパーソナリティの要因として、日常的に生活を営む生活域周辺の自然環境（生自環境）を取り上げ、生自環境の多寡が自然環境に対する態度（「態度」）や、身近な森林に対する評価（「評価」）および行動（「行動」）に与える影響について考究したものである。

具体的な目的は以下の5点である。①刺激とパーソナリティ、および「態度」や「評価」、「行動」との関係を整理し、本研究の機軸となるモデル（生自環境-反応系モデル）の構築をおこなう（第1章）。②自然環境に対する関心の度合い（関心度）や自然環境に対する価値観（自然観）を「態度」の指標として捉え、生自環境の多寡と「態度」との関係を明らかにする（第2章）。③生自環境の多寡と「評価」との関係を、身近な森林景観に対する評価結果の差異に着目して明らかにする（第3章）。④生自環境の多寡と「行動」との関係を、身近な森林に対するふれあい活動、管理活動への参加頻度の差異に着目して明らかにする（第4章）。⑤生自環境-「態度」-「評価」-「行動」の関係を統計的-視覚的な手法を用いて整理し、相互の要因の因果関係について詳細な分析をおこなう（第5章）。

第1章では、まず、本研究の主題である生自環境のパーソナリティ研究上の位置づけについて議論するとともに、刺激-反応系における連続的な枠組みを構造的に整理するため、刺激、判断を加え、「態度」、「評価」、「行動」の相互関係をモデルとして整理し、生自環境を考慮した反応系モデル（生自環境-反応系モデル）を作成した。

第2章では、評価主体の自然環境に対する「態度」（関心の度合い（関心度）、自然環境に対する価値観（自然観））との関係と、「形成期」および「成人期」の生自環境の多寡との関係について学生や社会人に対してアンケート調査をおこない分析した。その結果、生自環境と関心度については、統計的に有意な関連が確認できた。しかし、自然観については、一定の傾向を示すに留まっており、この理由として、TVやインターネットなどの情報化や画一的な学校教育による概念的な知識獲得の問題が考察されている。

第3章では、アンケート調査をもとに生自環境と身近な森林景観の「評価」との関係について検討している。その結果、「形成期」の生自環境の乏しかったグループが、森林景観に対してより風格があり雰囲気があると評価し、また「成人期」の生自環境の乏しかったグループが、森林景観をより珍しくより自然的であると評価することが明らかとなった。さらに、「形成期」の生自環境が豊かであると森林景観に対してより「見慣れた」と評価するという結果が得られ、「成人期」の生自環境が豊かであると森林景観に対してより「人工的」で「見慣れた」と評価するという結果を得ている。

第4章では、身近な森林に対するレクリエーションなどの活動（ふれあい活動）や、下

刈りなどの管理に関わる活動（管理活動）などの「行動」と、「形成期」および「成人期」の生自環境の多寡との関係について検討している。その結果、ふれあい活動と「形成期」の生自環境の間には際立った関係が見られないものの、ふれあい活動に参加する回数は、「成人期」の生自環境と有意に比例的な関係にあることが明らかになった。

第5章では、生自環境と「態度」-「評価」-「行動」との関係を、「形成期」および「成人期」の生自環境、「形成期」の自然にふれた機会や「成人期」の自然にふれる機会、年齢、性別、関心度、自然観、ふれあい活動、管理活動などの11項目を観測変数として共分散構造分析を行っている。その結果、生自環境から身近な森林に対するふれあい活動、管理活動に至る間に介在する各変数の関係がパス図として表され、「形成期」の生自環境は、「成人期」の生自環境、「形成期」の自然にふれた機会、「成人期」の自然にふれる機会などの、複数の観測変数と強い因果関係を有しており、各観測変数および潜在変数と複雑に連携することが明らかになった。また、「形成期」と「成人期」の生自環境あるいは自然にふれた機会といった要因が、個別に影響をしていると捉えるよりも、「形成期」から「成人期」に至る時系列的な因果関係の中で各要因の総合的な多寡や変化という点から捉える必要があることを明らかにしている。

以上、本研究は、従来から因果関係が指摘されながらも本格的には取り上げられてこなかった、形成期および成人期における生活域周辺の自然環境の多寡と、人々の自然環境に関わる態度、評価、行動との関係を定量的に分析し、関係性を明らかにしたものである。そして、分析の枠組みとしての反応系モデルを提案することと、アンケート調査を用いた分析によって相互関係を明らかにし、一定の成果を得ることに成功している。本研究で得られた知見は、今後の自然環境保全とパーソナリティとの関係に関する研究に資するとともに、身近な森林の取り扱いに際し、合意形成、環境教育、資源管理活動などに応用が可能であり、学問上応用上寄与するところが少なくないと判断される。よって審査委員一同は本論文が博士(農学)の学位論文として価値あるものと認めた。